

Longman Dictionary of Contemporary English 第6版の‘functional language’の分析 —モダリティ表現について—

藤本 和子

1 学習者用英英辞典の*Longman Dictionary of Contemporary English*第6版（以下LDOCE6）が2014年に出版された。辞典は、言語の変化を反映すべく改訂されていくが、特に学習者用辞典にあっては、言語の変化はもちろんのこと、学習者の必要性や英語教育をめぐる時代の要請を把握して、学習者に役立つ辞典であるための工夫が求められる。グローバル化時代において、英語教育がますます重要視され、日本の中学校、高等学校の学習指導要領にも、外国語の目標として、「コミュニケーション能力」の養成が掲げられており、母語話者大規模コーパスや学習者コーパスの分析に基づいて編纂された学習者用辞典が、英語教育において担う役割は大きい。例えば、コーパス分析により、実際の言語使用に基づいた、レジスター（言語使用域）による適切な言語表現の提示が可能になり、日常の言語使用場面におけるコミュニケーション活動に役立つ情報を辞典に盛り込むことができる。¹

本稿では、LDOCE6の中央ページに設けられたセクションFormality in spoken and written Englishで扱われている‘functional language’を分析する。日常生活の言語の使用場面で、それぞれの言語の働きのために使用される言語表現について、モダリティ表現の中から、助動詞と副詞に焦点を絞り、それらがどのように使用されているかについて調べ、その結果から、学習者のコミュニケーション活動のための表現指導について示唆を得ることを目的とする。

¹ LDOCE6のレジスターは、informal, formal, spoken, literary, legal, technicalなどである（LDOCE6, p. xi参照）。

モダリティの定義として、Carter et al. (2011) には、'Modality is about a speaker's or a writer's attitude towards the world. A speaker or writer can express certainty, possibility, willingness, obligation, necessity and ability by using modal words and expressions' (p. 288). とある。モダリティとは、話し手、書き手の物事に対する態度について言い、確実性や可能性などを表すために、助動詞や副詞などのモダリティ表現が用いられる。

2 まず、LDOCE6 の主な特徴について簡潔に見ておこう。LDOCEの初版は1978年に出版されており、およそ35年の間に改版を重ね、第6版に至っている。LDOCE6 には、'The starting point for any Longman dictionary is research. Research with both students and teachers' (p. viii). とあるように、英語学習者と英語指導者の両方の必要性や意見を反映しながら改訂を行うという編纂方針が記述されている。LDOCE6 が対象とする学習者レベルは、CEFR 基準のB2からC2レベルである。²

Longman社が出版する辞典は、the Longman Corpus Networkと呼ばれる、書籍、新聞、会話、広告などイギリス英語とアメリカ英語の書き言葉と話し言葉の両方からなる現在3億9,000万語のデータベースに基づいて編纂され、実際に使用されている自然な英語を掲載することを目的としている (LDOCE6, p. xii)。コーパスには、the Longman Learners' Corpusも使用されており、学習者の犯しやすい誤りや英語使用傾向の分析結果が辞典編纂に活かされている。このコーパスは、世界中の英語学習者から収集された書き言葉1,000万語を超えるものである (LDOCE6, p. xii)。

LDOCE6 には、230,000の語(句)と意味、165,000のコーパスに基づく用例、65,000以上のコロケーション、18,000を超える同意語、反意語などが掲載されている。LDOCE6 からは、新たな完全Online版が登場し、紙媒体の本体よりもさらに多くの語(句)や用例などを掲載している。³ 本稿では、紙媒体の本体に絞っ

2 Pearson English Language Teaching JAPAN・2017. 2017. Japan: Pearson Japan KK. p. 37参照。

3 LDOCE6のOnline版には、300,000の語(句)と意味、88,000の発音を伴う用例及び、100万のコーパスからの用例、147,000のコロケーション、48,000の同意語、反意語などが掲載されている。LONGMAN Dictionaries Online. <http://global.longmandictionaries.com/>にてアクセス可能。

て分析を行う。

LDOCE6 は、従来の特徴を維持しながらも、⁴ 語彙と文法についての情報をさらに充実させている。語彙に関しては、英語学習において最も重要な語とされる3,000語の the *Longman Communication 3000* を含む9,000語の the *Longman Communication 9000* に基づく語の頻度情報が、LDOCE6 において新たに導入された。⁵ LDOCE6 には、従来の3,000語と新たな9,000語について以下の説明がある。

Longman dictionaries have traditionally highlighted the 3000 most frequent words in English, so that learners know which words they need to learn first. These 3000 words enable you to understand 86% of the language. In order to understand a wide variety of authentic texts, however, research into vocabulary acquisition has shown that you may need to know as many as 8000-9000 word families. (p. 2126)

従来の3,000語は、最も頻度が高く、学習者が優先して習得する必要のあるものであり、さらなる英語理解のためには、8,000-9,000の word family を習得することが必要であることが分かる。この the *Longman Communication 9000* の語の見出し語は、他の見出し語が青色であるのに対して、赤色となっており、学習者が気づきやすいように工夫がなされている。それぞれの見出し語には、頻度情報として、●●●は、9,000語の中で、頻度の最も高い3,000語、●●○は、3,000語から6,000語、●○○は、6,000語から9,000語の中に入ることが示されている。さらに、LDOCE6 においても受け継がれているのは、使用頻度上位3,000語には、話し言葉と書き言葉の使用頻度情報が、**S1**、**S2**、**S3**、**W1**、**W2**、**W3** のように記されている。**S1**、**W1** は、話し言葉あるいは書き言葉において、使用頻度上位1,000語、**S2**、**W2** は、上位1,000語から2,000語、**S3**、**W3** は、上位2,000語から3,000語に入ることを表している。⁶ 主要な上級学習者用英英辞典が、それ

4 詳細は、LDOCE6 (pp. x-xiii) の 'How to use the Dictionary' を参照のこと。

5 The *Longman Communication 9000* のすべての語が掲載されているリストは、ウェブサイト www.longmandictionaries.com で閲覧可能である。

6 詳細は、LDOCE6, p. 2126 参照のこと。

ぞれ独自のコーパスに基づき、頻度情報を提示しているが、上記のような話し言葉と書き言葉のそれぞれの頻度情報を明示しているのは、現在のところ *LDOCE* のみである。これらの語の頻度情報は、学習者の語彙習得の参考になり、学習者が、実際のコミュニケーションにおける自然な英語使用を習得するのに大いに役立つと言えよう。

次に、*LDOCE6* では、辞典本体中央部 (pp. A17-A48) に、文法情報として、Grammar Guide が設けられた。辞典中央部の文法に関するセクションは、*LDOCE4* (pp. 971-975) の Language Notes を拡充させたものとも言えようか。*LDOCE4* では、文法項目として、Articles、Modal verbs、Phrasal verbs が扱われているが、*LDOCE5* では、文法セクションは辞典中央部から姿を消した。*LDOCE6* において、Grammar Guide として再び、辞典中央部に文法セクションが設けられたことになる。*LDOCE6* では、Adjectives、Adverbs、Nouns、Verbs、Prepositions の5つの文法項目が扱われている。⁷ 本稿では、モダリティ表現について、助動詞と副詞について分析することから、5つの文法項目のうち、参考までに、Adverbs と Modal verbs を含む Verbs の内容を Table 1 に記しておこう。

⁷ 文法を実際に活用できることを目指して、文法練習がオンライン (www.longmandictionaries.com) ができる。

Table 1: Grammar Guide: Adverbs と Verbs の内容

Adverbs	Verbs
Adverbs of frequency	Transitive and intransitive verbs
Adverbs of manner	Verb patterns
Adverbs of place	Modal verbs
Adverbs of time	Phrasal verbs
Adverbs of certainty	Short responses
Adverbs of degree	Using the continuous (progressive) form of verbs
	Using the passive
	Using the subjunctive
	Conditionals
	Talking about the future
	Reported speech

さらに、辞典本体中央部 (pp. A1-A16) には、Formality in spoken and written English についてのセクションが設けられている。このセクションは、*LDOCE6* で新たに設けられたものではなく、*LDOCE5* に始まり、*LDOCE6* に受け継がれている。*LDOCE6* において、記述の明瞭さのために一部加筆がなされた箇所があるが、内容は *LDOCE5* と同じである。*LDOCE6* の Formality in spoken and written English セクションは、同じあるいは似たような意味をもつ語（句）が、formal speech, formal writing, informal speech, informal writing のいずれにおいて、より適切に用いられるかについて情報を提示している。つまり、話し言葉と書き言葉について、それぞれの formality に合わせた適切な英語表現が掲載されている。*LDOCE5* と *LDOCE6* の Formality in spoken and written English は、*LDOCE4* (pp. 982-985) の Language Notes 中の Pragmatics を発展させたものとも言えようか。

このように、語彙と文法の記述を充実させ、学習者が文法的に正しいというのみでなく、話し言葉と書き言葉について、formality の違いに応じて適切な英語表現を使用できるよう編纂に工夫がなされている。語彙、文法、そして、日常生活の場面に応じた適切な表現を習得することは、実践的コミュニケーションを目指すために必要なことである。

3 ここからは、LDOCE6 の Formality in spoken and written English セクションを分析する。このセクションは、functional language に関するものであり、functional language の定義は、LDOCE6 において、'language that you use to do something, such as agreeing with someone or asking someone to do something for you' (p. A1) となされている。定義中の agreeing を含め、以下の9項目が設定され、それぞれの項目について、'in everyday English' や、'in formal English' などのパートが設けられ、formality の違いによる表現を提示している。最初の項目 Agreeing には4つのパート in everyday English、in formal English、strongly agreeing、partly agreeing がある。

(1) Agreeing

in everyday English/in formal English/strongly agreeing/partly agreeing

(2) Disagreeing

in everyday English/in formal English/politely disagreeing/strongly disagreeing

(3) Apologizing

in everyday English/in formal English/replying to an apology

(4) Opinions

in everyday English/in formal written English

(5) Requests

asking someone to do something in everyday English/more formal ways of asking someone to do something/asking for permission in everyday English/more formal ways of asking for permission

(6) Suggestions

in everyday English/less direct ways of making suggestions

(7) Hello

in spoken English

(8) Goodbye

in spoken English/in emails and informal letters/in formal letters and emails

(9) Thank you

in everyday English/in more formal English/replying when someone says thank you

これらの9項目には、『中学校学習指導要領』（第2 各言語の目標及び内容等 2 内容 (2) 言語活動の取扱い）と『高等学校学習指導要領』（第3款 英語に関する各科目に共通する内容等1）に記述されている「言語の使用場面の例」と「言語の働きの例」の中の、「言語の働きの例」と重なるものもある。詳細は3.1で述べることにする。

3.1 *LDOCE6* は、上級英語学習者用辞典であるため、『中学校学習指導要領』ではなく、『高等学校学習指導要領』の記述に照らして分析する。Table 2は、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」全30項目と*LDOCE6*のFormality in spoken and written Englishセクションの9項目を、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」の日本語及び『高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）』の英語をもとに対応させたものである。『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』には、「言語の働きの例」の言語表現例が提示されていないため、用例を比較して*LDOCE6*のFormality in spoken and written Englishセクションの項目と対応させることができない。したがって、あくまでも大まかな対応を表すものである。

Table 2: 『高等学校学習指導要領』 「言語の働きの例」と LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション中の項目

『高等学校学習指導要領』 「言語の働きの例」	LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション中の項目
a コミュニケーションを円滑にする (Facilitating communication)	
相づちを打つ (Nodding)	
聞き直す (Asking for repetition)	
繰り返す (Repeating)	
言い換える (Paraphrasing)	
話題を発展させる (Developing a topic)	
話題を変える (Changing topics)	
b 気持ちを伝える (Expressing emotions)	
褒める (Praising)	
謝る (Apologizing)	Apologizing
感謝する (Expressing gratitude)	Thank you
望む (Expressing desire)	
驚く (Expressing surprise)	
心配する (Expressing concern)	
c 情報を伝える (Transmitting information)	
説明する (Explaining)	
報告する (Reporting)	
描写する (Describing)	
理由を述べる (Reasoning)	
要約する (Summarizing)	
訂正する (Correcting)	
d 考えや意図を伝える (Expressing opinions and intentions)	
申し出る (Offering)	
賛成する (Agreeing)	Agreeing
反対する (Disagreeing)	Disagreeing
主張する (Asserting)	Opinions
推論する (Inferring)	Opinions
仮定する (Assuming)	
e 相手の行動を促す (Instigating action)	
依頼する (Requesting)	Requests
誘う (Inviting)	
許可する (Permitting)	
助言する (Advising)	Suggestions
命令する (Giving orders)	
注意を引く (Calling attention)	

注) 『高等学校学習指導要領』 の英訳は、『高等学校学習指導要領英訳版 (仮訳)』 の

ものである。LDOCE6 の Requests は、asking someone to do something と asking for permission の2つの場合が設定されている。

LDOCE6 は、大きく9つの言語機能を提示し、9項目中、7項目が、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」と関連している。Opinions に関しては、言語表現リストと例文から、『高等学校学習指導要領』の「考えや意図を伝える (Expressing opinions and intentions)」の中の、「主張する」と「推論する」に該当させた。LDOCE6 の Hello と Goodbye に対応する項目は、『高等学校学習指導要領』にはない。LDOCE6 の7項目は、『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」の「b 気持ちを伝える」、「d 考えや意図を伝える」、「e 相手の行動を促す」の中の項目と関連していることが分かる。

3.2 LDOCE6 の Formality in spoken and written English セクションで提示されている言語表現を含む例文からデータセットを作成し、助動詞と副詞の頻度を見てみよう。ソフトウェアは、AntConc⁸ を用いて分析する。このデータセットの Word Tokens は3,165、Word Types は880である。⁹ Table 3 には、AntConc の Word List ツールにより、使用頻度の高い順に50の語が示されている。Table 3 は分析結果をそのまま掲載しているため、語の表示方法について説明をしておきたい。語の頻度が同じである場合、順位はアルファベット順となっている。第1位の i は、例文中ではすべて大文字である。第6位の s と第32位の m は、動詞、助動詞の短縮形及び、s には、Let's の省略された us の s や所有格's の s、m には、例文中のアルファベット M も含まれる。第12位 n、13位 t は、否定の短縮形の一部である。

8 Anthony, L. 2014. AntConc (Version 3.4.3) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available online at <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>

9 データセットは例文から作成しており、Formality in spoken and written English セクションでリストアップされている言語表現は含まれていないため、例えば、言語表現として掲載されていても、その表現を用いた例文が掲載されていない場合、このデータセットに入っていない。例えば、Agreeing 中の言語表現 **I totally agree!** には例文がないため、この表現はデータセットに含まれていない。

Table 3: LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション例文中の語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	139	i	26	22	think
2	121	you	27	22	would
3	120	the	28	21	as
4	79	to	29	21	this
5	59	that	30	19	about
6	57	s	31	19	and
7	56	a	32	19	m
8	53	for	33	18	have
9	51	it	34	18	my
10	44	of	35	18	should
11	36	is	36	17	could
12	35	n	37	17	not
13	35	t	38	16	was
14	32	in	39	15	can
15	31	do	40	15	some
16	29	we	41	15	what
17	29	your	42	14	so
18	24	on	43	14	sorry
19	24	with	44	13	but
20	23	are	45	12	see
21	23	be	46	11	at
22	23	he	47	11	good
23	23	if	48	11	our
24	23	me	49	11	there
25	22	all	50	11	they

Table 3 の上位 50 位の中には、助動詞 would (第 27 位、頻度 22)、should (第 35 位、頻度 18)、could (第 36 位、頻度 17)、can (第 39 位、頻度 15) が含まれる。副詞は、Biber et al. (1999: 767) における、‘single adverbs’ や、副詞の働きをする ‘single nouns’ は、上位 50 位の中には見られない。Would の短縮形 ‘d が第 127 位、頻度 4 であるため、would/’d は頻度 26 となり、厳密には、第 18 位となる。以下、3.2.1

において助動詞、3.2.2で副詞について分析してみよう。

3.2.1 *LDOCE6 Formality in spoken and written English* セクション例文中で用いられ、使用頻度が全体の上位50位に入っている4つの助動詞のうち、本稿では、助動詞の過去形の *would*/'d (頻度26)、*should* (頻度18)、*could* (頻度17) について、これらが用いられている項目と意味を分析してみよう（分析の順は、Table 3の順位による）。

Tables 4-6は、*would*/'d、*should*、*could*の、*Formality in spoken and written English* セクション中の項目別の使用順位である。*Would*/'dは、第1位は、*Requests* において10件(38.5%)、第2位、*Disagreeing* 7件(26.9%)、第3位、*Suggestions* 3件(11.5%)であり、第1位と第2位の *Requests* と *Disagreeing* で65.4%となり6割を超える。*Should*は、第1位が、*Opinions* 8件(44.4%)、第2位、*Disagreeing* 5件(27.8%)、第3位、*Agreeing* 3件(16.7%)である。第1位の *Opinions* のみで5割近くを占めている。*Could*は、第1位が、*Requests* 10件(58.8%)、第2位、*Suggestions* 4件(23.5%)、第3位は、*Agreeing*、*Opinions*、*Hello* において、それぞれ1件ずつ(各5.9%)である。第1位の *Requests* において6割近く使用されている。*Would*/'dと *could*は、いずれも第1位が、*Requests* であり、*Suggestions* も *would*/'dは第3位、*could*は第2位で順位は異なるが上位3位に入っている。これらの助動詞が依頼や提案をする場合に用いられていることが分かる。*Requests*と *Suggestions*は、『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」の「e 相手の行動を促す」に含まれ、*would*/'dの第2位の *Disagreeing*と *could*の第3位の *Agreeing*は、『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」の「d 考えや意図を伝える」に含まれる。*Should*について、*would*/'dと *could*との顕著な違いは、第1位の *Opinions* において、*would*/'dと *could*と比較して、使用頻度が高いことである。*Opinions*と、第2位の *Disagreeing*、第3位の *Agreeing*は、『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」の「d 考えや意図を伝える」に含まれる。

Table 4: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 would/'d の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Requests	10	38.5
2	Disagreeing	7	26.9
3	Suggestions	3	11.5
4	Agreeing	2	7.7
5	Apologizing	1	3.8
5	Opinions	1	3.8
5	Hello	1	3.8
5	Thank you	1	3.8
	Total	26	100.0

Table 5: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 should の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Opinions	8	44.4
2	Disagreeing	5	27.8
3	Agreeing	3	16.7
4	Apologizing	1	5.6
4	Suggestions	1	5.6
	Total	18	100.0

Table 6: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 could の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Requests	10	58.8
2	Suggestions	4	23.5
3	Agreeing	1	5.9
3	Opinions	1	5.9
3	Hello	1	5.9
	Total	17	100.0

次に、would/'d、should、couldの意味を分類してみよう。助動詞の意味は、文脈により複数の解釈がありうるなど、明確な分類は難しい場合があるが、ここで

は、用例から読み取ることのできる情報と Formality in spoken and written English セクションの項目名をもとに分類を試みた。意味を表す日本語は『ジーニアス英和辞典 第5版』を参考にする。Tables 7-9は、これらの3つの助動詞の意味の分析結果をまとめたものである。

Table 7: Formality in spoken and written English セクション中の would/'d の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	意思	8	30.8
2	丁寧な依頼・勧誘	7	26.9
2	可能性・推量	7	26.9
4	控え目な希望・考え	4	15.4
	Total	26	100.0

Table 8: Formality in spoken and written English セクション中の should の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	義務・助言	18	100.0
	Total	18	100.0

Table 9: Formality in spoken and written English セクション中の could の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	丁寧な依頼・提案・命令	11	64.7
2	許可（丁寧な表現）	4	23.5
3	可能性・推量	1	5.9
3	能力	1	5.9
	Total	17	100.0

Would/'dの意味は、第1位が「意思」、第2位は、「丁寧な依頼・勧誘」と「可能性・推量」である。Shouldの例文中の意味は、すべて「義務・助言」である。Shouldの18件のうち、8件(44.4%)がOpinionsを表す例文中で用いられていることも理由の一つとして考えられる。Couldの意味は、第1位が「丁寧な依頼・提案・命令」、第2位、「許可（丁寧な表現）」、第3位、「可能性・推量」及び「能力」である。Would/'dとcouldには、慣用表現として学習者になじみのある表現が見受けられ

る。例えば、would/'d like to、would you...?、would you mind...?、could I...?、could you...?などである。

助動詞の意味の分類は、これまで様々な分類法が論じられている。ここでは、Biber et al. (1999: 485)の2つの大きな意味カテゴリーにしたがって論を進めていこう。助動詞は、intrinsicとextrinsicの2つのタイプの意味をもつ。Biber et al. は、前者にdeontic、後者にepistemicという用語が使用されることもあるとしている。いわゆる「義務的意味」と「認識的意味」と呼ばれるものである。Intrinsicのタイプには、permission、obligation、volition (or intention)の意味があり、extrinsicのタイプには、possibility、necessity、predictionの意味が含まれる。

LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション例文中の助動詞、would/'d、should、couldのうち、shouldはすべての例文中で、「義務・助言」の意味、つまり、intrinsic meaningをもっている。Would/'dとcouldは、例文により、intrinsicとextrinsicのいずれの意味も見られる。

次に、これら3つの助動詞が例文中で表す時に注目してみよう。Shouldは、shallの過去形ではない。Would/'dとcouldに関しては、過去を表すwouldの用例はなく、couldは、17例中、1例に時制の一致の用法が見られる (*For Ruskin, art was something that could not be produced using machines.*)。つまり、このcouldの1件を除いて、用例中のすべてのwould/'d、should、couldは、現在あるいは未来について表している。いくつか例を挙げてみよう。

- a) I *would* dispute the idea that violent images on television cause people to commit acts of violence. [Disagreeing]
- b) *Would* it be possible for you to come in for an interview some time next week? [Requests]
- c) Is there any way you *could* change the date of the meeting? [Requests]
- d) You *could* always ask someone to record the programme for you. [Suggestions]

Biber et al. (1999)は、助動詞の主な機能について、'... relating to speaker stance

rather than the marking of time distinctions. For example, modals associated with past time are also associated with hypothetical situations, conveying overtones of tentativeness and politeness For this reason, we regard modal verbs as unmarked for tense' (p. 485). のように述べ、*Could I sit here a minute, Joyce? / Could you sign one of these too? Would you mind?* のような例文を挙げている。さらに、Carter et al. (2011)には、助動詞の過去形について、'We often use the past forms to be more polite or formal, or less direct' (p. 296). とあり、*Could you just have a quick look at the pasta? / Would you find me another pen? / You might want to change the formatting.* のような例が見られる。助動詞の過去形が不確かさや丁寧さを表すことができ、話し手、書き手の事柄に対する態度を表すことができる。話し手、書き手の確信度に応じた表現法を学ぶことにより、学習者は、断定的、直接的な表現を不適切に用いてしまうことを避けることができる。¹⁰

LDOCE6 の Formality in spoken and written English セクションの、助動詞の過去形を含む言語表現について、以下の注記を挙げておこう。

[T]hese phrases [**could you/would you/do you think you could**] sound more polite than **can you** or **will you**. You use them especially when talking to people you do not know well, or when asking someone to do something difficult or important . . . (p. A10).

[C]**ould you possibly / is there any way you could** used when asking someone to do something that is likely to be difficult or inconvenient for them, when you think the answer could easily be 'no' . . . (p. A10).

これらの記述から、助動詞の過去形を含む言語表現は、丁寧な表現となり、あまり親しくない人に依頼をする場合、依頼によって相手にかかる負担が大きい時や、相手からの承諾が期待しにくい場合などに用いられることが分かる。

10 学習者の助動詞使用について、Folse (2009: 231)などを参照のこと。

藤本(2016)は、『高等学校学習指導要領解説』(英語に関する各科目に共通する内容等2)の言語材料の1つである文法事項の助動詞についての記述に照らし、助動詞の過去形が、「可能性・推量」のような現在や未来を表す用法について、学習者のレベルに配慮しつつ、高校生、大学生に指導をすることにより、物事に対する確信度に応じた表現活動ができるようになることは、学習者のより効果的なコミュニケーション活動につながることを述べた。

『高等学校学習指導要領解説』(英語に関する各科目に共通する内容等2)の助動詞に関する記述を引用する。

助動詞の代表的なものは、can, may, must, will などである。これらは、話し手の心的態度を表す重要な表現であり、丁寧な依頼などに不可欠である。中学校では慣用表現以外では過去形を指導しないが、高等学校では必要に応じて過去形も指導する。(下線筆者)

『高等学校学習指導要領解説』には、助動詞の指導について、「高等学校では必要に応じて過去形も指導する」とあり、指導しなければならぬとは記述されていない。しかしながら、LDOCE6のFormality in spoken and written Englishセクションの分析結果から判断して、助動詞の過去形が、現在・未来について表すことができ、後者の用法が、物事に対する確信度や、丁寧さを表すこともできることを指導することは、学習者がより効果的なコミュニケーション活動を行うことができることにつながると考える。

Cater (2011)は助動詞の形態とそれらが表す時について、'All of the modal verbs [can, could, may, might, will, shall, would, should and must] can refer to present and future time. Only some of them [could, might, would and should] can refer to past time' (p. 295).と記述している。このように、助動詞が、過去形であっても現在と未来のことを表すことができることを、学習者に分かりやすく指導する工夫が必要であろう。

3.2.2 次に、*LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション 例文中の副詞について分析してみよう。副詞は、その意味により、複数のカテゴリーに分類されるが、本稿では、Biber et al. (1999: 552-560) の分類のうち、stance adverbs の中の epistemic meanings（認識的意味）をもつ epistemic stance adverbs について調べてみよう。¹¹ Epistemic stance adverbials について、Biber et al. (1999) は、‘... express the speaker’s judgment about the certainty, reliability, and limitations of the proposition... can also comment on the source of the information’ (p. 854) のように記述している。

調査する副詞は、Biber et al. (1999: 869) の ‘most common stance adverbials’ とされる以下の14の副詞である。¹²

epistemic—doubt/certainty

probably / maybe / perhaps / of course / certainly / definitely

epistemic—actuality

really / actually / in fact

epistemic—imprecision

like / sort of / kind of

epistemic—source of information

according to + NP

epistemic—limitation/perspective

generally

11 Biber et al. (1999) は、副詞を意味により、8つの主たるカテゴリーに分類している。つまり、place, time, manner, degree, additive/restrictive, stance, linking, other meanings である。Stance adverbs は、さらに3つのカテゴリー (epistemic, attitude, style) に分類されている。

12 Adverbs と adverbials の区別は、Biber et al. (1999: 538) を参照のこと。本稿では、両者を副詞と呼ぶことにする。

Table 10は、*LDOCE6* Formality in spoken and written English セクションの例文中で用いられている副詞の頻度をまとめたものである。Really の総件数は、10件であるが、このうち8件は、形容詞を強調するもの(e.g. *'It's really hot today.'* *I know - I wish I hadn't worn my sweater.'* [Agreeing]) を含め、stance adverbではなく、degree adverbであるため、それらを除いてある。

Table 10: *LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション例文中の epistemic stance adverbials

Epistemic stance adverbials	Frequency
epistemic — doubt/certainty	
probably	0
maybe	1
perhaps	1
of course	1
certainly	0
definitely	1
epistemic — actuality	
really	2
actually	0
in fact	0
epistemic — imprecision	
like	0
sort of	0
kind of	0
epistemic — source of information	
according to + NP	2
epistemic — limitation/perspective	
generally	1
Total	9

Table 11は、Formality in spoken and written English セクション例文中で用いられている認知的意味をもつ副詞が、どのような言語の働きの場合に用いられているのかについて表している。これらの副詞が、Suggestions、Disagreeing、Agreeing、Opinionsで用いられていることが分かる。

Table 11: *LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション例文中の epistemic stance adverbials と項目

Epistemic stance adverbials	Frequency	Formality in spoken and written English セクション中の項目
epistemic — doubt/certainty		
maybe	1	Suggestions
perhaps	1	Suggestions
of course	1	Disagreeing
definitely	1	Agreeing
epistemic — actuality		
really	2	Disagreeing (2件)
epistemic — source of information		
according to + NP	2	Opinions (2件)
epistemic — limitation/perspective		
generally	1	Agreeing
Total	9	

副詞の例をいくつか見てみよう。Epistemic — doubt/certainty に分類される of course は、Disagreeing を表す例文 *Of course he's entitled to his opinion, but I think he is in a minority on this issue.* で用いられている。*Of course he's entitled to his opinion* という表現を用い、他者の意見を尊重した上で、自分の意見を述べており、丁寧さが表れている。さらに、definitely が用いられた Agreeing を表す例文 *'We should ask them for more money.'* *'Definitely!'* では、相手の言うことに対する強い賛成が表される。Epistemic — source of information に分類される according to は、Opinions の例文中 *According to the researchers, 'some patients tended to see their illness as a*

punishment’. / *Locally grown food can be better for the environment than organic food, according to a report published yesterday.* で用いられ、情報の出所を述べ、それらの見解が意見のように表されている。

Table 12は、上の9件の副詞のFormality in spoken and written Englishセクション中の項目別の使用順位である。第1位は、Disagreeingで3件(33.3%)、第2位は、Agreeing、Opinions、Suggestionsが同件数で2件ずつ(それぞれ22.2%)である。『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」に対応させると、Disagreeing、Agreeing、Opinionsは、「d 考えや意図を伝える」に含まれ、Suggestionsは、「e 相手の行動を促す」に含まれる。

Table 12: LDOCE6 Formality in spoken and written Englishセクション例文中の項目別 epistemic stance adverbialsの使用頻度

Rank	Formality in spoken and written Englishセクション中の項目	Frequency	%
1	Disagreeing	3	33.3
2	Agreeing	2	22.2
2	Opinions	2	22.2
2	Suggestions	2	22.2
	Total	9	100.0

Formality in spoken and written Englishセクション(p. A12)のSuggestionsの項目中には、控え目な提案をする場合に、副詞maybeやperhapsがしばしば用いられることについて、‘People often make suggestions in a less direct way by using **maybe** or **perhaps**, or by using **may/might**’. のような注記がある。ここで注目したいのは、副詞と助動詞の共起である。控え目な提案をする表現例として、*Maybe we could ask people if they’d be interested in having a concert?* / *Perhaps you could change the settings on your computer?* (p. A 12)が掲載されている。認識的意味をもつ副詞と助動詞の過去形couldが共に用いられることにより、提案するときの控え目さが増していると言えよう。

LDOCE4の中央に設けられたLanguage Notes: Pragmaticsの、‘Feelings and

attitudes'の項目中には、副詞と助動詞について以下の記述がある。

When you are making a statement or expressing an idea, you will very often 'modify' what you are saying by using adverbials that express a degree of certainty or uncertainty. For example, if you say 'I'll probably go to the party', it means that you are not entirely sure that you will, and you want your listener to be aware of your uncertainty. If you say 'I'll definitely go to the party', you want your listener to know that you are certain to go to the party. . . . you can also use modal verbs to express these feelings and attitudes (p. 982). (下線筆者)

感情や態度を表す時に、確信度に合わせて副詞が用いられ、助動詞もまた同じ機能をもつことが述べられている。このように、副詞、助動詞のようなモダリティ表現の使用についての関連付けられた記述は、学習者の英語使用のために有意義ではないだろうか。

参考までに、『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』には、モダリティに関連する記述は、『高等学校学習指導要領解説』の助動詞の項目に見られるのみで（3.2.1参照）、副詞や、その他のモダリティ表現については言及がない。話し手、書き手の事柄に対する態度を表すことができるのは助動詞のみではない。今後、副詞をはじめ、他のモダリティ表現の体系的な指導法も考慮される必要があるのではないだろうか。

4 ここでは、Formality in spoken and written Englishセクションの9項目において、everydayと(more) formalとタイトルの付いた以下のパートの例文から、それぞれ小規模であるがデータセットを作成し、everyday Englishと(more) formal Englishにおける助動詞と副詞の使用頻度を比較してみよう。¹³ 3.2と同様に、AntConcのWord Listツールを用いて分析する。

13 Everyday Englishのパートに掲載されている言語表現の中にも、formalityに異なりがあることを断っておきたい。例として、Agreeingの項目のin everyday Englishパートの中には、言語表現例として、**you're right** や**I agree**などが掲載されており、両者を比較して、**'this [I agree] sounds a little more serious and more formal than saying you're right'**のような記述がある。なお、言語表現及び、それらを含む各例文すべてにformal/informal、spoken/writtenの注記が付けられているわけではない。

Everyday English

Agreeing_in everyday English
Disagreeing_in everyday English
Apologizing_in everyday English
Opinions_in everyday English
Requests_asking someone to do something in everyday English
Requests_asking for permission in everyday English
Suggestions_in everyday English
Thank you_in everyday English

(More) formal English

Agreeing_in formal English
Disagreeing_in formal English
Apologizing_in formal English
Opinions_in formal written English
Requests_more formal ways of asking someone to do something
Requests_more formal ways of asking for permission
Goodbye_in formal letters and emails
Thank you_in more formal English

Everyday Englishのデータセットは、Word Tokensが1066、Word Typesは387であり、(more) formal Englishは、Word Tokensが932、Word Typesは415である。いずれも1,000語程度のデータセットである。

4.1 助動詞の過去形は、everyday Englishと(more) formal Englishのいずれにおいても、頻度上位50位に、could、should、wouldが入っている。分析結果は、それぞれAppendix AとAppendix Bに掲載する。Everyday Englishと(more) formal Englishにおいて、これら3つの助動詞の順位が異なる。Everyday Englishでは、should(第20位、10件)、could(第28位、8件)、would(第47位、5件)の順に使用頻度が高く、(more) formal Englishにおいては、would(第8位、15件)、could(第

32位、5件）、should（第42位、4件）の順である。¹⁴ Wouldの短縮形'dを含めると、それぞれ1件ずつ件数が上がり、everyday Englishでは、6件（順位は、第37位となる）、(more) formal Englishでは、16件（順位は変わらない）である。

Table 13は、everyday Englishと(more) formal Englishの比較結果を表したものである。Couldとshouldの頻度は、(more) formal Englishよりもeveryday Englishにおいて、頻度が高いが、両者に有意差はない。一方、would/'dは、(more) formal Englishにおいて有意に高い($p < 0.05$)。例文中にwould/'dが用いられているFormality in spoken and written Englishセクションの項目を見てみると(could、should、wouldの項目別頻度はAppendix C参照)、everyday Englishでは、第1位、Requests (3件)、第2位、Suggestions (2件)、第3位、Opinions (1件)であり、(more) formal Englishでは、第1位、Requests (7件)、第2位、Disagreeing (5件)、第3位、Agreeing (2件)である。いずれも第1位はRequestsであるが、would/'dの頻度は、(more) formal Englishにおけるほうが高く、everyday Englishでの頻度の2.3倍である。Everyday Englishにおいて第2位のSuggestionsと第3位のOpinionsの項目は、(more) formal Englishには見られない。

Would/'dとcouldでは、couldは、上で述べたように、everyday Englishと(more) formal Englishの間で有意差はないが、would/'dと異なり、(more) formal Englishよりもeveryday Englishにおいて、Requestsでの頻度が高く（前者4件、後者6件）、さらに、(more) formal Englishにおいて、Opinionsでの使用がある（1件）。Would/'dとcouldの意味の違いについては、本稿では論ずることはしないが、両者の違いを垣間見ることができる。

Table 13: Everyday English vs (more) formal English (助動詞)

	Everyday English	(More) formal English		
	RF	RF	LL	<i>p</i> -value
could	8	5	0.35	
should	10	4	1.91	
would/'d	6	16	-6.16	< 0.05

RF= raw frequency; LL=log-likelihood values。LLの-の値は、助動詞の頻度が、(more) formal Englishよりも、everyday Englishにおいて低いことを表す。

¹⁴ 順位の見方は、3.2参照。

4.2 副詞について、3.2.2の epistemic stance adverbialsの頻度を Table 14 で見てみよう。Reallyは、everyday Englishには4件あるが、すべて形容詞を強調する用法であるので除いてある。検索結果からも分かるように、調査した epistemic stance adverbialsの頻度は、everyday Englishにおいては0件、formal Englishでは全5件である。ここで、0件は、どのような意味をもつのか、つまり、本来、出現するはずのない語なのか、あるいは、データセットが小規模なために出現しないのかについて考察をしてみよう。Biber et al. (1999)の調査結果と比較することにより、何かしらの見解を出すことができるかもしれない。

Biber et al. (1999)のコーパスデータの特性とレジスターの設定からして、Formality in spoken and written Englishセクションから作成したデータセットと比較するのは完全な比較とは言えないが、データの特性が完全に一致するコーパスやデータセットどうしの比較は、通例、困難であるため、あえて今回の比較を試みてみよう。Biber et al. (1999)は、conversation、fiction、news、academic proseの4つのレジスターを設定している。同書(p. 869)の conversationと everyday Englishのデータを、そして、academic proseと (more) formal Englishのデータをそれぞれ比較する。¹⁵

Table 14: Everyday English vs (more) formal English (副詞 [epistemic stance adverbials])

	Everyday English	(More) formal English
epistemic-doubt/certainty		
probably	0	0
maybe	0	0
perhaps	0	0
of course	0	0
certainly	0	0
definitely	0	0
epistemic-actuality		
really	0	2
actually	0	0
in fact	0	0

¹⁵ LDOCE6の everyday Englishと (more) formal Englishの違いは、話し言葉と書き言葉の違いではないが、formalityの違いによる語の使用については、参考にすることができると思われる。

epistemic-imprecision		
like	0	0
sort of	0	0
kind of	0	0
epistemic-source of information		
according to + NP	0	2
epistemic-limitation/perspective		
generally	0	1
Total	0	5

Biber et al. (1999: 867)によると、これらの14の副詞は、全般に、conversationにおいて、他のレジスターよりも使用頻度が高い。Biber et al. (1999: 869)の14の副詞のうち、レジスター conversationのreallyを除くすべての副詞の頻度は、100万語当たり、1,000件以下である。¹⁶ レジスター conversationにおけるreallyは、100万語あたり、1,100件(認識的意味をもつかどうかあいまいなものも含めると、1,500件)である。Everyday Englishと(more) formal Englishのデータセットは、それぞれおよそ1,000語規模であるため、例えば、Biber et al. (1999: 869)のprobablyのconversationの出現件数は、700件であり、1,000語あたり0.7となり、1,000語規模のデータセットには、出現せず、reallyのみが、1,000件当たり、1件(1.5件)出現する可能性があることが予測される。したがって、everyday Englishにおいて、これらの副詞が0件であったのは、データセットが小規模であったためではないだろうか。一方、(more) formal Englishにおいて、reallyが2件(Disagreeing)、according toが2件(Opinions)、generallyが1件(Agreeing)出現したことは、どのように考えるとよいであろうか。Biber et al. (1999: 869)のレジスター academic proseでは、reallyとaccording toはいずれも、100万語当たり100件、generallyは、100万語あたり200件であることから、1,000語あたりのデータセットに出現する可能性は、0.1件あるいは、0.2件となる。(More) formal Englishに、really、according to、generallyが出現した理由として、Formality in spoken and written Englishセクションは、functional languageという言語の働きに応じた特定の英語表現を提示したセ

16 LDOCE6は、主としてイギリス英語を扱っているが、Formality in spoken and written Englishセクションには、アメリカ英語も含まれているため、Biber et al. (1999: 869)のイギリス英語とアメリカ英語を一緒にした頻度と比較する。

クションであり、英語表現の特徴に偏りがあることが考えられる。

5 本稿では、LDOCE6の辞典本体中央部に設けられたFormality in spoken and written Englishのモダリティ表現のうち、助動詞と副詞に焦点を絞って分析を行った。言語表現の分析のため、Formality in spoken and written Englishで提示されている例文から作成したデータセットを使用した。本稿で用いたデータセットは小規模なものであるため、助動詞、副詞の使用頻度をつかむには、今後、大規模コーパスを調査して、より大きな観点から分析する必要があることは言うまでもない。学習者が、適切な表現を用いて、考えや意図を伝えたり、依頼や提案をして、相手の行動を促すなどして、効果的なコミュニケーションを図ることができるように、助動詞や副詞などのモダリティー表現の指導は重要であろう。今後、これらのモダリティ表現の体系的な指導法の研究も必要であると考え。LDOCE6は、独自の大規模コーパスを使用し、それらの分析結果に基づいた言語表現を掲載している。したがって、Formality in spoken and written Englishセクションで提示されている言語表現も大いに参考にしながら、コミュニケーションに役立つ場面に応じた言語表現の指導に活用していきたい。

Appendix A: Formality in spoken and written English セクション everyday English 例文中の
語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	58	i	26	8	be
2	51	you	27	8	can
3	38	the	28	8	could
4	22	a	29	8	he
5	22	s	30	7	all
6	21	that	31	7	did
7	20	it	32	7	very
8	19	for	33	7	what
9	19	to	34	6	m
10	16	do	35	6	not
11	16	is	36	6	some
12	16	of	37	5	and
13	15	n	38	5	bad
14	15	t	39	5	feel
15	12	about	40	5	right
16	12	in	41	5	say
17	12	me	42	5	sorry
18	11	your	43	5	this
19	10	on	44	5	was
20	10	should	45	5	way
21	10	think	46	5	with
22	9	as	47	5	would
23	9	if	48	4	agree
24	9	my	49	4	always
25	9	we	50	4	come

Appendix B: Formality in spoken and written English セクション (more) formal English
 例文中の語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	48	the	26	6	opinion
2	31	to	27	6	was
3	29	i	28	6	with
4	24	that	29	5	accept
5	21	for	30	5	all
6	20	of	31	5	at
7	18	you	32	5	could
8	15	would	33	5	many
9	14	a	34	5	me
10	13	is	35	5	my
11	13	it	36	5	our
12	11	in	37	5	some
13	10	are	38	5	who
14	10	as	39	4	he
15	10	be	40	4	her
16	10	this	41	4	people
17	10	your	42	4	should
18	9	we	43	4	so
19	8	and	44	4	their
20	8	not	45	4	there
21	8	s	46	3	apologize
22	7	have	47	3	appreciate
23	7	if	48	3	but
24	7	on	49	3	can
25	7	view	50	3	do

Appendix C: Formality in spoken and written English セクション everyday English / (more) formal English 例文中の could、should、would/'d の項目別使用頻度

	Everyday English	Frequency	(More) formal English	Frequency
could	Requests	6	Requests	4
	Suggestions	2	Opinions	1
	Total	8	Total	5
should	Opinions	6	Agreeing	2
	Disagreeing	2	Opinions	2
	Apologizing	1		
	Suggestions	1		
	Total	10	Total	4
would/'d	Requests	3	Requests	7
	Suggestions	2	Disagreeing	5
	Opinions	1	Agreeing	2
			Apologizing	1
			Thank you	1
	Total	6	Total	16

Acknowledgements

この論文は、科学研究費補助金の助成を受けて行った研究成果の一部である (JSPS KAKENHI Grant Number JP16K02856)。

References

- Anthony, L. 2014. AntConc (Version 3.4.3) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available online at <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>
- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Biber, D. et al. 2002. *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Carter, R. et al. 2011. *English Grammar Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Folse, K. 2009. *Keys to Teaching Grammar to English Language Learners*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 藤本和子. 2016. 「*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 第9版の 'Express yourself' notes の分析と英語教育への活用」『英語英文学研究』第40巻2号, 51-72. 創価大学英文学会.
- Nuyts, J. and Auwera, J. (eds.). 2016. *The Oxford Handbook of Modality and Mood*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman Group Limited.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 『ジーニアス英和辞典 第5版』2014. 東京: 大修館書店.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 4th ed. 2003. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE4)
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th ed. 2009. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE5)
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE6)
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 9th ed. 2015. Oxford: Oxford University Press. (OALD9)
- 『中学校学習指導要領』2008. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/___icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf (accessed 20 September 2016).
- 『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf (accessed 20 September 2016).

- 『中学校学習指導要領英訳版（仮訳）』2010. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298356.htm (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領』2009. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』2009. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）』2010. 文部科学省. Available at http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm (accessed 20 September 2016).

Pearson English Language Teaching JAPAN • 2017. 2017. Japan: Pearson Japan KK.

LONGMAN Dictionaries Online. 2016. Pearson education Ltd. Available at www.longmandictionaries.com. (accessed 25 September 2016).

PearsonELT.com. 2016. Pearson. Available at <http://www.pearsonlongman.com/dictionaries/corpus/> (accessed 20 September 2016).